

2011年8月31日発行

市史だより

F u k u o k a

13

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring/Summer 2011

TAKE FREE

特集

能古島

博多湾に浮かぶ山

連載コラム「歴・史・万・華・鏡」 ● 連載コラム「福岡市史への歩み」

部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）

●能古島石ものがたり

享和二（一八〇二年）に「かんたん（邯鄲、能古島西北岸付近）という所の石は、お城の石垣用としてのみ用いるように」（『福岡藩郡役所記録』）と達しが出されています。能古島の石は石垣に適しているのです、むやみに持ち出されは困るといふことでしょう。

「能古島の石」を読み解く鍵は、島の成り立ちにあります。このあたりは一億年前（白亜紀）、地下深いところで花崗岩系の「北崎トール岩」が貫入し、その後隆起して風化浸食を受けた地域です。それが再び沈降して、四五〇〇万年前（古第三紀）に堆積層（島南部に見られる残島層）が形成されました。三〇〇万年前（新第三紀末）になると北西九州を中心に広域のマグマ活動が起こり、あちこちから大量に流れ出した玄武岩溶岩が、当時の地表をシート状に覆います。当時この一帯は窪地であったため、溶岩が流れ込み、玄武岩の厚い層を形成しました。玄武岩は緻密で硬く、基盤や花崗岩類と比べると浸食されにくいので、マグマ活動の終息後、北部九州の地表が著しく浸食される中、玄武岩に厚く覆われたこの一帯は浸食されずに残り残され、高い台地となったのです。邯鄲付近で採られていたという石は、花崗岩系の石や玄武岩だったのでしょう。特に玄

武岩は、割れ方に特徴があり、硬いわりには美しい形のまま持ち出すことが容易です。このあたりで玄武岩が採れる能古島・今山・玄界島・相島などのうち、『福岡藩郡役所記録』で能古島の名前が挙がったのは、福岡城から一番近いという地理的な事情もありそうです。

石材利用は、近世だけではありません。古墳時代、福岡平野の石室で玄武岩の使用が多かった時期にも、能古島の石が活用されています。後に、鴻臚館や元寇防塁築造のために集められた石の中にも能古島産のものがありますが、それらは築造のために能古島から持ち出されたものだけでなく、それ以前（例えば古墳時代）に福岡平野に持ち込まれていたものの再利用もあったと考えられます。明治には製塩に必要な「塩釜石」の生産を一手に手がけていたと『早良郡誌』にありますし、昭和にかけては、島の中腹数カ所に石切場を設け、玄武岩を採掘していたといえます。

永きにわたって「石材」で注目されてきた能古島は現在、学問的にも欠かすことのできない存在です。一般道の傍や海岸には、島の成り立ちを語る地層が露出し、北浦（五ページマップ内G）では、玄武岩溶岩が噴出した痕跡（写真2）が観察できるなど、地質学や岩石学の調査・研究・教育のフィールドとして注目されています。



島のあちこちで岩肌が見られる

1 採石場跡 2 玄武岩溶岩の跡 3 也良岬付近（1『能古博物館だより』第37号/2同、第39号より転載）



アクセスマップ

能古渡船場まで【西鉄バス】

- ① 博多駅から（約50分）
 - ▶ 博多バスターミナル1Fのりば 312番：のこ渡船場行き
 - ▶ 博多口/博多駅前Aのりば 9, 300, 301, 302, 303番：のこ渡船場行き
- ② 天神から（約30分）
 - ▶ 天神バスセンター前 1A のりば 300, 301, 302, 303番：のこ渡船場行き

能古渡船場から【フェリー】

- ① 市営渡船（約10分）
- ② 海上タクシー（約5分）



能古島マップ【北側】



(背面) (腹面)

B: 石斧

縄文時代が始まる前後に作られた。



C: のこのしまアイランドパーク

西区姪浜にあった町家を園内に移築(明治8(1875)年建築/福岡市指定有形文化財)。



E: 檀一雄の文学碑

「最後の無頼派作家」といわれた檀一雄(1912~76)は戦後すぐに妻律子を亡くし、幼い太郎をつれて身を寄せた瀬高町でヨソ子と出会い再婚。のちに女優になった娘ふみをもうけ、『リツ子 その愛』『リツ子 その死』で文壇に復帰した。直木賞受賞後、昭和49年に能古島に移住し、終の住処とした。『火宅の人』を最後に、51年死去。毎年5月に檀をしのんで「花逢忌」が文学碑の前で催されている。



朱盃【個人蔵/福岡市博物館 寄託】
能古島の廻船虎吉丸(とらよしまる)の進水を記念する盃。積載量1700石クラスの大型弁才船(べさいせん)だった

A: 也良岬

8世紀、ここで防人が博多湾を行きかう船に目を光らせていた。
沖つ鳥鴨といふ船の 帰り来ば
也良の防人 早く告げこそ
沖つ鳥鴨といふ船は 也良の崎
廻みて漕ぎ来と 聞こえ来ぬかも
(『万葉集』巻16)



也良岬



石斧が発掘された地点



のこのしま
アイランドパーク



牧の神社



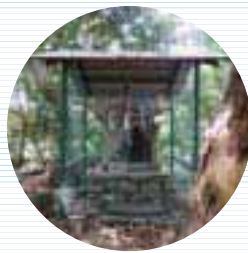
檀一雄の文学碑

郡邸
(かんたん)

能古島キャンプ村

D: 牧の神社

アイランドパーク近くの牧の神公園に祀られている石祠で、碑文には寛政11(1799)年に、島に馬牧を設置した際に再建されたことが記されている。



大海原を渡り全国各地へ

福岡藩の年貢の一部は、若松(北九州市)・横浜(福岡市西区)に集められ、船で江戸・大坂へ運ばれ売却されました。この輸送を担ったのが、今津・唐泊・浜崎・宮浦・能古島の五浦からなる五ヶ浦廻船です。五ヶ浦廻船は17世紀半ばから藩の御用物・年貢米を輸送しましたが、しだいに天領(幕府直轄地)や他藩の年貢米、そのほか材木などの運搬も請け負うようになりました。その活動は本州の沿岸全体に及んでおり、なかには北海道の函館・江差・石狩川にまでとどいた記録もあります。

石器の材料は島外からも?!

西町を中心に島内のあちこちで、黒曜石(天然ガラス)をはじめ、石器に使われる石材が見つかります。黒曜石は真っ黒のもの、灰色で鈍い光のもの、透明度が高いものなど複数種類。道具として完成したものや作る時に出たクズのほかに、原石もありました。佐賀県や長崎県、大分県で産出された黒曜石たちです。古くなり輝きを失ったものもあります。チャートなど能古島で採れる石もありました。能古の「石ものがたり」は旧石器時代にまでさかのぼりそうです。



黒曜石ほか石材【福岡市博物館蔵】
西町付近で発見されたもの

防人の島・廻船の拠点・リゾートアイランド——。
今回は博多湾の真ん中において長い歴史を持ち、「海」と「山」の魅力が交錯する島、能古を巡ります。

能古島 — 博多湾に浮かぶ山 —

特集



Special Feature

● 鹿垣しかがき — 狩猟の島の面影 —

かつて島を南北に区切る、東西約二キロメートルの石垣がありました。島に棲む獣から作物を守る「鹿垣」です。その先端は、鹿が海岸を伝って入り込まないよう海まで延びていました。海岸に近い部分は東西いずれもすでに失われ正確な位置はわかっていませんが、今でも島の中央部でその痕跡を見ることができず（マップ参照）。

鹿垣のはじまりは江戸時代にさかのぼります。藩主の猟場が島に設けられると、島民といえども勝手に狩をすることができなくなり、増えすぎた猪や鹿が里に下りてこないように防いだのです。完成したのは天保七（一八三六）年のことでした。

藩主の猟場であることから、能古島は狩猟の島としても著名であったようです。寛政十（二七九八）年には秋月藩主の鹿狩りが行われ、一八〇頭近い鹿を狩ったと記録に残されています。幕末になると外国人たちが狩猟に訪れるようになりました。慶応二（一八六六）年には外国人の一行が鹿六〇頭を仕留めたとのことです。

そうした中、長崎在住イギリス人ガラバ

らが島での狩猟許可を県庁に求めたのは明治四（一八七二）年九月のことです。ガラバらは以前に藩主より狩猟の許可をもらったので今回も狩猟をしたいと申し出ます。廃藩置県によって藩の狩猟場は県庁が管理していました。県庁は時代が変わったので許可できないと断ります。これに対してガラバは、せっかく長崎からやってきているので是非とも許可して欲しいと食い下がりました。結局、県庁が折れて今回限り条件に許可をしました。なお、この「ガラバ」は長崎グラバー邸で有名なトマス・グラバーであるという説があります。

この時の県令（県庁の責任者）有栖川宮熾仁親王は、直後の十月に県庁の役人を連れて、狩猟のために能古島を訪れます。この時の成果は二六頭でたいそうご機嫌であったと記録に残っています。しかし、この後、能古島の鹿は数年間で急速にいなくなりました。

大正年間になると当時の村長によって屋久島から鹿が移入され、島内には再び鹿が増えました。太平洋戦争後にはアメリカ軍兵士たちが狩猟のために来島するようになったほどです。こうやって一度は増えた鹿ですが、結局その後はいなくなりました。

狩猟の島として有名だった能古には、鹿垣だけが今に伝わっています。



4 明治頃の狩猟者たちの様子（「能古小学校百年誌」より転載） 5 島の東海岸（マップ内Gの北側）。鹿垣はこの海岸まで延びていたとされる現在の鹿垣。このように残っているのはほんの一部で、そのほとんどが今は草木に覆われ埋没している



高僧がやってきた！

じょうわ 承和 14 (847) 年、さいちよう 最澄の弟子であった円仁に短期留学先の唐から帰国しました。本人の日記、『入唐求法巡礼行記』によると、彼は鴻臚館に入る前に能古島で下船し、一泊しています。たび重なる渡航の失敗や、唐で思うように巡礼できなかったことなど、必ずしも順調ではなかった旅を、鴻臚館を目の前にしてどのように思い返したのでしょうか。その後、円仁はすぐに入京するようという朝廷の指示には従わず筑紫に留まると、住吉神社・香椎宮等のために金剛般若経5000巻を転読しました。これは渡唐の際に祈った經典のようです。転読を終え、弟子が迎えに来たところで、彼の日記は終わっています。のちに彼は天台座主となり、延暦寺と天台宗を統括しました。



◎ 慈覚大師円仁像(部分)
【福岡市博物館蔵】

能古島大ピンチ

かんにん 寛仁 3 (1019) 年、じょしん 女真人(中国東北部の民族)の船団が博多湾を襲いました(刀伊の入寇)。50艘にも及んだその船は、大きいもので12尋、小さくても8~9尋あったといえます(尋は人が手を上げた長さ)。4月8日、女真人は能古島を襲い、翌朝、ここを拠点に鴻臚館の警固所(警備担当の役所)に焼き討ちをしかけました。幸いこれは大宰府に阻止され、女真人は能古島へと戻ります。激しい風と高波のために2日間停戦状態が続くと、女真人は島を離れ西へと移動し、大宰府軍と戦いながら、日本を離れていきました。大宰府にとって、海を挟んで向かい合う能古島を拠点に鴻臚館が襲われたことは、おおいに脅威だったことでしょう。能古島は鴻臚館の生命線とも言える存在でした。なお、能古島では女性6人子ども3人と牛24頭・駄馬44頭が被害を受けました。10世紀に編集された『延喜式』によって、能古島に牛の官営牧場が置かれていたことは有名ですが、刀伊の入寇の時には馬もかなりの数いたようです。

禅僧がみた能古島



中世の能古島は、てつあんどうしやう 鉄庵道生やぜつかいちゆうしん 絶海中津といった禅僧によって漢詩の題材とされました。絶海中津の漢詩集『蕉堅藁』には「題野古島僧房壁」という漢詩が収録されています。能古島にやって来た喜びと、帰路につく寂しさを詠んだものです。『戊子入明記』などの当時の日中通商に関する記録にも能古島のことが書かれています。当時の禅僧は日中通商において大きな役割を果たしており、通商船に同乗して中国へと渡海していました。「題野古島僧房壁」に詠まれた僧房とは、このような通商の途上で能古島にやって来た禅僧のために用意されたものだったのかもしれない。

能古島マップ【南側】

F: 集落跡 ~その1・弥生時代前期末~
甕や壺の破片、砥石などが見つかった。壺には貝殻の縁でつけられた鳥の羽のような紋様が、砥石には丸く小さなものを研いだ痕がある。
【福岡市博物館蔵】

I: 早田2号墳
7世紀前後に造られた古墳。昔の記録では、島内のあちこちに古墳があったとされるが、現在確認できるのは、早田にある2基のみ。

J: 能古博物館
近世の儒学者、亀井南冥・昭陽親子の資料を所蔵。敷地内には万葉歌碑や近世の能古焼古窯跡(福岡市指定史跡)もある。

L: 集落跡 ~その2・弥生時代中期~
集落跡~その1~で見つかったものより少し新しい時期の土器の破片が見つかった。

FGH: 玄武岩溶岩の跡
北浦城跡
発掘調査によって、幅約5m・長さ約23mにわたる堀跡を確認。

蒙古塚
L: 集落跡 ~その2~

K: 白鬚神社
能古島の産土神として古くから鎮座する神社で、祭神は住吉大神・神功皇后・志賀明神等。本殿・拝殿ともに市の有形文化財。毎年10月9日に「白鬚神社おくんち行事」が行われており、周辺4地区(江ノ口・東・西・北浦)で用意された供物は奉納される。供物は新穀のうるち米を固め新藁で巻いた「オキョウ苞」や、柿・栗・蜜柑を桶に盛った「モリモン」などで、その豪華さは圧巻。

始まったころの

号砲は日の出と正午の二回だった

明治十九（一八八六）年七月にわが国の標準時が定められた。といっても人々に時間を守る習慣はなく、福岡区内には時間の標準を示すものもなかった。したがって人々の認識している時間はバラバラで事に臨んだ時にあちこちで不便が生じていた。そこで社会生活改良を提唱していた郷土史家の江藤正澄は、実業家の古賀男夫とともに標準時を報せる私立号砲会社を設立。大砲を大坂砲兵工廠から購入し西公園の山上に設置し、砲手は黒田藩砲術家だった末永巴を雇い、二十一年七月二十二日より日の出と正午の二回発砲することにした。正午は福岡電信局が出すわが国の標準時を用いたが、日の出は季節によって変わるということで八月一日より払暁の発砲は午前五時に決められた。しかし有志者の寄付金や区会の補助金による経営は心細く、八月以降は火薬代節約のため正午の一回のみとなり、二十三年一月十四日にはついに運営に行き詰まりこの日かぎり発砲は中止となった。

市民に「ドン」と呼ばれて親しまれた号砲も、なくなったための不便や音が聞こえない寂しさなどで号砲の再開を望む声があがり、江藤正澄は市会議長宛に建議書を提出。さらに二月一日に集会を開いて有志者の賛助を求めた。江藤は大きな爆発音による苦情に対処するためドンの砲口を海にむけるなど工夫して再開の準備を進めた。市会は市費補助を否決したが官吏や有志者の寄付もあって、二十四年六月二十日からドンを再開。二十五年三月九日からは市役所の指導のもとで洲崎（今の中央区須崎公園）の旧砲台にて発砲、さらに三十一年三月二十三日には福岡聯隊司令部建設のため西公園下の波奈旧砲台に移転することになった。博多の人には遠くて聞こえにくいとの声もあったが昭和六（一九三二）年三月三十一日まで、市庁舎の上に防空演習のサイレンが設置されるまでドンは鳴り響いた。



▲てるも光雲神社。号砲は本殿裏にある荒津山の山頂に設置されたという

お知らせ

ご購入

- ▶ 福岡市博物館ミュージアムショップ
福岡市早良区百道浜3-1-1 / 電話:092-823-2800
※お電話でのご注文・ご発送（着払い）も承ります。
- ▶ 福岡市情報プラザ（福岡市役所1階）
福岡市中央区天神1-8-1 / 電話:092-733-5333
- ▶ ジュンク堂書店福岡店
福岡市中央区天神1-10-13 メディアモール天神1～4F
電話:092-738-3322
- ▶ 文化芸術情報館アトリエ（博多リバレイン地下2階）
福岡市博多区下川端3-1 / 電話:092-281-0081

お問い合わせ

- ▶ 福岡市博物館 市史編さん室
福岡市早良区百道浜3丁目1-1
電話:092-845-5245

新刊のご案内

資料編 近世1 領主と藩政

【A5判 上製本（函入り）1,000頁】 頒価 5,000円

豊臣期の筑前国・名島領に関する史料、福岡藩主黒田家に関する史料、幕府と福岡藩の関係を示す史料、福岡藩政に関する史料を収録。



資料編 考古3 遺物からみた福岡の歴史

【A5判 上製本（函入り）780頁】 頒価 5,000円

板付遺跡などの未公開資料や福岡市外に流出した考古資料の全貌を明らかにする。また、動物骨など自然遺物から、人間と自然の関わりを、福岡の歴史として再現。

既刊本のご案内

資料編 中世1 市内所在文書

【A5判 上製本（函入り）1,350頁】 頒価 5,000円



特別編 福の民 —暮らしのなかに技がある—

【A4判 ソフトカバー 330頁】 頒価 1,800円

第7回福岡市史講演会を開催します『九州と東アジア—辛亥革命の衝撃』

講演 有馬 学
【九州大学名誉教授／福岡市史編集委員会委員長】
ジョシュア・フォーゲル
【カナダ ヨーク大学教授】

日時 平成23年10月29日（土）午後2時開演

場所 エルガーラ中ホール（福岡市中央区天神1-4-2 エルガーラ7階）
▶ 福岡市営地下鉄七隈線 天神南駅3番出口 徒歩1分
▶ 福岡市営空港線 天神駅13番出口 徒歩5分
▶ 西鉄天神大牟田線 西鉄福岡（天神）駅 徒歩2分

考 古

古墳の調査では、石室や墳丘、共に葬られた品々から、背後にある文化や葬られた人の姿を探り、古墳が造られた「場所」から、葬られた人を取りまく環境を考えます。古墳がどこからよく見えるのか、また古墳からほどよく見えるのか、その立地は、葬られた人の活動域を考えるヒントになるのです。『資料編 考古3』では、小戸1号墳などを例に海辺にある古墳の築造がどのような社会的・政治的な背景のもとで行われたのか、またそこに葬られた人がどのような人だったのかといった問題について考察します。

古 代

石清水八幡宮(京都府八幡市)のご厚意により、石清水文書の調査を始めました。石清水文書には、石清水八幡宮と関係のあった管崎宮・香椎宮(ともに現福岡市東区に所在)に関わる古代の古文書が多数含まれています。たとえば、管崎宮の神宮寺に建立された多宝塔をめぐる一巻は、大宰府・筑前国司・管崎宮の間で交わされた大変貴重な古文書です。この多宝塔は最澄の発願に基づいて、もともとは宇佐宮弥勒寺に置かれる予定でした。しかし、塔に安置する法華経が書写の途中で火災に遭うなどして頓挫したため、あらためて管崎宮に建立されることになりました。塔では法華三昧の仏事がとり行われ、その費用を捻出するために荘園が経営されていたことも石清水文書には記されています。これらの古文書は原本調査によって精密な校訂を加え、『資料編 古代』に収録する予定です。

中 世

平成二十六年刊行予定の『資料編 中世2』に収録する史料の収集作業が続いています。収録史料の調査のため活字化された刊本史料をめぐっていると、同じ史料が複数の史料集に掲載されていることがあります。そのような場合、同じ史料のほかに史料集によって文字が異なっていることがよくあります。中世文書はくずし字で書かれているものが多く、中にはくずし字の読解に慣れた人にも非常に判読しづらい文字があります。そのため、このような史料集ごとの違いが生まれます。また、単純な校正上のミスによる間違いもあります。このような間違いを直すためにも、原本や写真帳で確認することが必要になります。精度の高い市史にするため、日々奮闘しています。

近 世

『資料編 近世1』が刊行となりました。長かった編集作業も終わってみると、あつという間のようにも感じます。ですが編集が終わったのも束の間、もう次巻『特別編 福岡城(仮)』の編集が始まります。『特別編 福岡城(仮)』は近世から近現代までをその取り扱う範囲とします。福岡城域に建てられた施設は、お城をはじめ、兵舎、病院、陸上競技場、野球場等々数え上げればきりがありません。これらの諸施設は現存せずその姿を写真でしか確認できないものも多くあります。近世専門部会では近現代専門部会と共同でこれらの写真を探しています。情報をお持ちの方はご一報いただければと思います。

近 現 代

『資料編 近現代1 維新見聞記』(平成二十四年刊行予定)の編集もいよいよ翻刻原稿を活字に組む作業に入りました。原史料のサイズと刊行する本のサイズは異なるため、一行の文字数と一ページの行数も当然異なります。資料によっては文字の配置にも意味があるため、レイアウトの配置は慎重に、しかし資料集として読者の便を考えてわかりやすい組を目指しています。しかし、言うは易く行いは難し。専門家とスタッフが何日も顔をつきあわせて、午前決めた方針が午後に変更されることもままあります。

民 俗

博多の夏は山笠に始まり、大浜流灌頂に終わるといいます。そして夏が終わると管崎宮放生会。よく「暑さ寒さも彼岸まで」といいますが、博多では、放生会の頃には涼しくなる、秋が来るともいいます。祭りと季節感が一体になっていることがわかります。祭りは日常生活に賑わいをもたらすだけでなく、季節を彩る・区切るもの、季節感を醸し出すものであり、人々の暮らしを理解するためには不可欠な要素であるといえるでしょう。平成二十四年刊行の『民俗編 春夏秋冬・起居往来』では、「春夏秋冬」の部として、市内の祭礼・催事を取り扱います。大規模な祭礼だけでなく、各地域の祭りも可能な範囲でとりあげます。

ここ2回ほど新しく発見した資料の紹介や、待望久しかった『新修 福岡市史』の第1回配本について報告しました。『新修 福岡市史』がこれから順調に発行していくためには、まずは編さんに当たる研究者の方々のご尽力が何より重要と考えます。そして次には長期計画でこの事業を進めるのですから、編さん体制を万全なものにする福岡市の姿勢が必要なこととなります。

自治体史編さんは決して一自治体の都合によるものではありませんでした。市制50周年を記念して刊行された『福岡市市制施行五十年史』の場合は、昭和13(1938)年という戦時体制突入の時期に当たり、わずか5ヵ月で脱稿したということであり、短期間で製作したことは驚くばかりですし、これから話題とする昭和34年から発行を始めた『福岡市史』の場合は、その開始時期と考えられる昭和25年頃の社会状況を考えると、第2次世界大戦の影響から立ち直りつつも、朝鮮戦争が勃発したときに当たります。福岡市は地理的に朝鮮半島に近く、落ち着いた世情であったろうと考えられますが、昭和26年段階では編さん事業は「予算の捻出が出来ない、時期尚早」という理由で活動は止められています。

この卑近な事例だけでも編さん事業は社会状況に微妙に影響されてきたことをご理解いただけるものと思います。今後20余年の間、編さん事業に支障をきたすような状況にならないよう祈るばかりです。

話を昭和25年、小野有耶介おののうやすけが編さん担当を命ぜられた時点に戻しましょう。小野は従来の経緯を充分に把握し、計画的かつ円滑な事業推進体制を

考えていたようです。動きを年表風に整理してみましょう。

＜昭和25年3月＞

小野、囑託となる。さらに6月には事務吏員となる。

＜同年10月＞

市史編さんに対する構想をタイプ浄書。執筆基準、総説等を作成。

＜同年11月＞

編さん委員会委員を決定(委員長は助役、委員は市幹部10名程)。編さん委員会顧問を決定(庁外学識者9名ほか2名)。「庁達第23号」で「福岡市市史編さん委員会規程」が決まる。

＜昭和26年7月＞

市史編さん委員会開催するも、流会、無期延期。理由は「予算捻出不可能、時期尚早」。

＜昭和27年6月＞

小野、市長宛に「市史編さんに関する上申書」を作成。

これ以後の数年間日記の類は何も見当たりません。「福岡市勢要覧」の人口動向と財政の決算額の推移を見てみますと、人口は昭和20年から毎年2～3万人ずつ順調に伸びていきますが、財政の方は幅はあるものの28年からは赤字に転落している様子がうかがえます。市の幹部が「時期尚早」とした理由はこのあたりにあったのかもしれませんが。

劇的に変化するのは昭和31年になってからです。いよいよ編さん事業が始まります。

※「市史だより Fukuoka 9」に掲載の「福岡市史への歩み」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
誤：「福岡市市史編さん委員会規定」→ 正：「福岡市市史編さん委員会規程」

表紙の写真



能古島全景

【写真提供：福岡市埋蔵文化財センター】

能古島は周囲12kmほどの小さな島です。福岡市中心部から約1時間という近さで、リゾート地としても人気です。島はとても自然豊かで、のこのしまアイランドパークやキャンプ村などたくさん見所があります。特産品は甘夏やアサリなど。また最近では能古の地サイダー「ノコリータ」や、「のこバーガー」も人気です。島の方々は皆さん温かく、取材の際には大変親切にいただき、お世話になりました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

写真提供一覧

- 福岡市埋蔵文化財センター
P3▶能古島マップ【北側】B
P5▶能古島マップ【南側】I
- 福岡市文化財部文化財整備課
P3▶能古島マップ【北側】C
P5▶能古島マップ【南側】J
- 能古博物館
P3▶能古島マップ【北側】E
P4▶写真⑥
P5▶上部写真：左から2,4番目
P8▶「表紙の写真」解説
- 河口綾香
P5▶上部写真：左から3番目